

ややこしい  
ややこしい

～青紫蘇と  
大葉～

芳田尚哉

「なんや、これ、お前」

男は目の前にいる若い男を睨みながら手を突き出した。その手には、透明のパックが握られており、その中には緑色のギザギザの葉っぱが数枚入っている。

「なんですかのん、兄さん」

若い男は突然の事に戸惑う。

「なんですかのんちゃうわ。お前はガキンちょ以下か」

「せやからなんですかのん。なに怒ってますのん」

「そんなんもわからんのか。お前はお遣いもできんのかい。ほんまガキ以下やな」

「ちょ、なに怒ってますのん」

「まだわからんのかい。わしはな、紫蘇の天麩羅が食いたかったんや」

「そうですね。そう言うてました」

若い男は淡々と相槌を打つ。それが男をさらに刺激してしまう。

「お前な。わかっとるんやったら、なんでこんなもんこうてきたんや」

もう一度、持っているものを突き出す。そのパックの表面には`大葉、の文字が印刷されている。

「大葉ですよん」

「そうや、大葉や。わしはなにをこうてこい言うた？」

「紫蘇でしょ？ 正確には青紫蘇でよかったんでしょ？ まさか赤紫蘇ちゃいますよね、天麩羅やし」

「.....そりゃようわからんけど、あの緑の葉っぱや。サクサクうまいやつや。紫蘇の天麩羅いうたら、わかるやろ」

「そうですね。せやから、ちゃんと買ってきましたやん」

「こうてきとらんやろ」

男はパックをグイグイ若い男に突きつける。

「お前は日本語が読めんのか。これは紫蘇やのうて大葉や」

「そうですね」

「なんやその態度。似とるけど、これは大葉やろ。紫蘇こうてこい言うたやろ」

「せやから、ちゃんと買ってきてますやんか」

「お前、ほんまに大丈夫か？ これは紫蘇やのうて大葉やろ」

「せやから、それでええんですって」

「ようあれへんわ。紫蘇買い直してこんかい」

「兄さん、紫蘇と大葉はおんなじですねん」

「はあ？ なに言うとなねん。似とるかもしれへんけど、ちゃう名前やんけ」

「似てるもなにも同じもんですさかい」

「はあ？ お前、ほんまに大丈夫か？ 名前がちゃうやろ」

「そうですよ。でも同じなんです」

「わけわからん」

「あのですね。紫蘇——青紫蘇は植物そのものの名前なんです。で、その葉っぱを商品にしたものの名前が大葉なんです」

「.....お前、なに言うとなねや？」

「せやから、紫蘇って植物を、売る時に大葉って名前で売ってるんです」

「なんでやねん。紫蘇は紫蘇でええやんけ。なんでそんな事せなあかんねん」

「そんなん知りませんわ。せやけど、同じなんですって」

「あかん。もうなに言うとなのかさっぱりや。もうええわ。とりあえず、これで天麩羅作れや」

男は理解する事を放棄した。妥協ではなく放棄だ。

「.....わかりました。ちょっと待ってて下さい」

若い男はため息を吐いて大葉を受け取り台所に向かった。

ややこしいややこしい～青紫蘇と大葉～

<http://p.booklog.jp/book/110260>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110260>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト